

11月18日「創価学会創立記念日」

導入部

11月18日は、5月3日と並ぶ創価学会の最重要の記念日です。11月18日の歴史と意義を学んでいきましょう。

1枚目／創価学会創立記念日（8枚目の絵の裏に貼る）

11月18日は、創価学会の創立記念日です。1930（昭和5）年11月18日、創価学会は、教育者の集まりである「創価教育学会」として、初代会長・牧口常三郎先生と、後の第二代会長となる戸田城聖先生の師弟二人で出発しました。

現在、世界192カ国・地域に広がるSGI（創価学会インタナショナル）の源流は、ここにあるのです。

2枚目／師弟の絆が生んだ『創価教育学体系』（1枚目の絵の裏に貼る）

11月18日を創立記念日としたのは、牧口先生の著書である『創価教育学体系』の第1巻の発刊日が、1930（昭和5）年の11月18日であったからです。

「創価」という言葉は、牧口先生と戸田先生との対話から生まれました。「人生の目的は価値の創造である」と説く牧口先生から、「創価」という名称を戸田先生が提案したのです。

牧口先生は、編集・発刊の一切に携わった戸田先生の尽力なくして、『創価教育学体系』の発刊はなかったと述べています。

3枚目／国家権力による弾圧（2枚目の絵の裏に貼る）

1928（昭和3）年に日蓮大聖人の仏法に帰依していた牧口先生・戸田先生は、人々の幸福を願い、民衆の生活を向上させていく必要があると痛感していました。そして、それは仏法の実践によって可能であると訴え、創価教育学会は、各地で座談会を開き、地道な活動を展開していきました。

しかし、1930年代当時、日本は戦争へと突き進んでいった時代で、国民を統制するため、国家神道による思想の統一を図っていました。これにより創価教育学会は、国家権力から弾圧されていくことになります。

4 枚目／神札を拒否 (3枚目の絵の裏に貼る)

国家権力に迎合した宗門は、大聖人の仏法の根本である御書を改ざんし、学会に対しては、神札を受けよう迫ってきました。しかし、牧口先生は、宗門の要求を断固として拒否しました。

「一宗が滅びることではない、一国が滅びることをなげくのである」と。

牧口先生の民衆を思う大感情が、そこにはあったのです。

5 枚目／牧口先生の殉教 (4枚目の絵の裏に貼る)

牧口先生と戸田先生は迫害を恐れず、信念を貫きました。その結果、治安維持法違反と不敬罪の容疑で逮捕されることになりました。

牧口先生は、厳しい取り調べの最中も、仏法の正義を堂々と主張し続けました。約1年4ヶ月の獄中闘争の末、牧口先生は1944年(昭和19年)11月18日に亡くなりました。この日は、奇しくも『創価教育学体系』第1巻発刊日でありました。

6 枚目／牧口先生の遺志を継ぎ、戸田先生は一人立つ (5枚目の絵の裏に貼る)

1945年(昭和20年)7月、豊多摩刑務所(戦後、中野刑務所と改称)を出た戸田先生が最初に目にしたのは、あたり一面焼け野原となった日本の惨状でした。その光景を前に戸田先生は、牧口先生の遺志を継ぎ、広宣流布の実現を目指して一人立ったのです。

戸田先生は牧口先生の一周忌法要で、こう宣言しました。

「先生は、死して獄門を出られた。不肖の弟子の私は、生きて獄門を出た。……広宣流布は、誰がやらなくても、この戸田が必ずいたします」

7 枚目／75万世帯の達成 (6枚目の絵の裏に貼る)

この新出発にあたって戸田先生は、学会の活動は教育改革だけに留まらず、社会・生活の幅広い改革を目的とすることから、創価教育学学会の名称を「創価学会」へと変更しました。そして、戦後の荒廃した社会の中で、多くの民衆に希望と勇気を与え続けていったのです。

第二代会長の戸田先生は、目標とした75万世帯の弘教を達成し、その翌年の昭和33年に逝去されました。

8枚目／創立の精神を受け継ぎ、世界へ（7枚目の絵の裏に貼る）

牧口先生・戸田先生の意志を継いで、第三代会長に就任した池田先生は、創価学会をさらに大きく発展させ、SGI（創価学会インタナショナル）を結成して世界192カ国・地域に日蓮大聖人の仏法を広めました。そして、今日の創価学会、また池田先生の平和・文化・教育活動は、世界中の多くの知性から賞賛されています。それは、同時に牧口先生・戸田先生の偉大な功績の証明でもあります。

池田先生は、創立の月・11月に綴られた随筆のなかで、次のように呼びかけられています。

『創立の月』とは、新しい歴史を“創る月”である。正義の師子が猛然と“一人立つ月”でもある。（中略）『創立の月』は、常に『今この時』にある。今の瞬間、瞬間を勝ち取ってこそ、次の五十年、百年にわたって崩れぬ、常勝の学会が『創立』されていくからだ！」と。

11月18日には、創価学会の歴史を学ぶとともに、民衆の幸福に尽力された三代会長の崇高な精神を受け継ぐ意義があるのです。

決意など